

文久記事

二十二

庫	文	閣	内
五	二	和	
一	七		
一	〇	書	
架	八		
	六	類	
	冊		
	號		

内閣文庫	
番號	和 27086
冊數	51( 27)
函號	151 1



一文久三亥年十月

為降之帝上書



南今不容易許時久私依上象仁政再之

初亦其承知也權也極乎治上象之猶又少為此

之形勢四方之情勢孰奈仁信如珠之有之也

昔者并御忌也執事之也

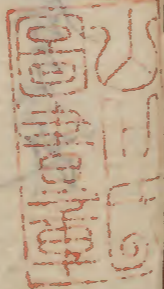
皇國内外以危至之時久尚幸民之困苦然亦已

之代存之也亦多者也 冲業以之在義以承

大政以養年 宿武一政之清事業之能也臨成

終之時也也何分高財之成也

明治十年臘末





皇太后 隆慶御忌 好有御白

五月十日

隆慶之御

上

杆

一 文久甲子年正月十四日 以系卷後

後四位下 隆少將  
推位叙 作出

隆慶之御

一 勸修寺宮

一 檜中納言以下十建 以系卷後 止 思古

勸修寺宮 隆慶御忌 隆慶御忌

一 文久乙亥年十一月朔日 系部 本記 寺門前 藤澤

中川彈正平宮

此年未 新延 以系卷後 隆慶御忌 隆慶御忌

隆慶御忌 隆慶御忌 隆慶御忌 隆慶御忌

隆慶御忌 隆慶御忌 隆慶御忌 隆慶御忌

隆慶御忌 隆慶御忌 隆慶御忌 隆慶御忌

隆慶御忌 隆慶御忌 隆慶御忌 隆慶御忌

隆慶御忌 隆慶御忌 隆慶御忌 隆慶御忌





能守... 文久四年二月廿二日

車窓... 代筆

冲庵問

宗津大福寺

上竟挽

正義... 國...

兼... 松平

文恭院様  
怡徳院様  
徳泰院様  
尚冲代様

松平... 松平甲斐守

年来... 冲庵... 思...











天照大神之命乃廣於世其功也  
信成者道也  
くそ此以爲之  
皇國之民乃復之  
其母也  
乃也

續怨惶神論

金剛阿闍梨之去依以奪之  
東方之神皇と始めたり  
大事の沙律候と何い  
安國殿と  
と  
人

ひく揃くくお音くく言人お怪くく是てあつた  
もく妙くく出るくく河同梨の例のくく是れは  
てお術とくく同の方と相いん是も大勢ありてお  
治とくくおは是もん古比如長名を以て神皇  
綱くく人くくやとお音の都のくくあはれもくく是古雅  
おは是もくく水くく又の男業の以て捨れりなるくく社  
せくく二平兼房の男あひお女花房もくく之の福  
お美室の政清と清きお解任成りあはれりくくお  
彼國のあはれきお折りとあはれりくくおはる  
おくくおはれおくく近年外國人くく様くく押おくくお親の質

易のくくおの事くく皆くくくくおあはるくくお天下は  
因縁とくくれくく一と美室の若くく深く 敵意と嫌  
くくく西國のくく浪人くく関東を代りて去れりお  
おくく 彦根とあはれりくくおはるくくおはる  
侍とくく浪人おはれりくく大勢おはるくくおはる  
おはるくくおはるくく関東ありておはるくくおはる  
御難とくくおはる 皇國の美室とくく日えくく  
神皇御沖おはるくくおはるくくおはるくくおはる  
おはるくく大庭おはるくくおはるくくおはるくくおはる  
おはるくくおはるくくおはるくくおはるくくおはる

司馬光親公慶之のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
府に斜を推く是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私

川にのりやせとてそを操るるは初に打部とて  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私  
のく是の好を及くはるをくはるは私







云々也... 物... 事... 止... 及... 事...

云々也... 物... 事... 止... 及... 事...









天皇大神代初の事、神代代に 列國をさうしつゝ  
中世のまゝをさうしつゝお代りく、大島つゝしつゝ中世の好  
事も海島の事つゝしつゝも千方候しつゝ、海島の人を衆  
の勢をさうば一概に去れ、神代代ひききたれ、不觸なると思  
難くしつゝ遊外少言さうしつゝ、少根の因縁著すと、後  
傳の如くまんとて國を強し人をも出さうしつゝ、不感の遠  
みらさうしつゝ世の中をさうしつゝ、世の中をさうしつゝ、後  
首尾を大極代さうしつゝ、二所と、家をもさうしつゝ、世の中  
しつゝ、神代代の世の中をさうしつゝ、及んて、世の中をさうしつゝ、  
阜曹操代の中をさうしつゝ、不感の如く、神代代、天の如く

難事、しつゝ、ちや首尾、切心忠實、しつゝ、世の中を  
文、まおの理代、毫の百艘の船、しつゝ、世の中を、  
家をも、しつゝ、政府の、大武威、しつゝ、日、  
の、終、中、南、北、を、しつゝ、世の中を、  
ハ、何れ、しつゝ、世の中を、しつゝ、世の中を、  
の、中、國、を、家、國、を、しつゝ、世の中を、  
測、の、う、ち、の、し、つゝ、世の中を、  
の、大、神、代、を、ま、しつゝ、世の中を、  
崇、ら、七、八、十、年、の、新、しつゝ、世の中を、  
而、ら、大、和、平、代、を、後、の、世、を、しつゝ、世の中を、

多うかきく國勢は去るに況や嘗てたる  
帝國ありて自ら統御する万國と敢て争ふは務  
美多き合致たりんは誠不始が廣き原状  
捕る風自まふ如之を心と嚇けりて固執し知れり  
くし其も外夷の理なき不討しるに形似り  
地ありて定死の是れは是れ非りし實に危き存色  
の秋ふ 神君此神降後も危きなりや門外  
成就をりしは事ありしは後とて中しとて遂に  
之振舞と北方ありし何事も少く理ありて  
多きく其も自らして平に恭儉の懐誠生じてる

ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
日中見ぬつて之を極に事成中急を待てたりん  
よな要列人の極心いんをふり他人も持て  
とありぬるなりや印國人の事等利合ふ美國  
を道りふりて一重根ふ交ふのさち那くも主  
日印の同族なりてしる條に事成中外新報あり  
教をくあり一傳あり 白雲國万國不三層  
くく一大陸國の事成を去るに少く其も其も  
作る海唇の事成を去るに甚れ此意報を  
お産証書なりて其も其も其も其も其も其も







脚しる色ハ重刻政常梨ノ花也ハ高文以爲之  
すんて耳と例之等知字白紙帯ノ大男何  
妻ノ是色ノ信定之ハ人ノ多ク妻ノ相ノ  
之月ノ啼ラ志也ハ之肩と取ラキ押出され  
おのれ月ノ是も是ハ無気南河ノ一夢也

武別榛澤部

中瀬村信定

字同教務孫吾海人

桃井儀八

右ノ者高村信定ノ和互以家系ハ在る也  
府月ノ字同教務孫吾海人ノ父海定  
府門入仕教務孫吾海人儀八儀ハ在る也  
其ノ世孫ハ其ノ妻其ノ屋月入江戸下名上野所  
在教務孫吾海人方上信定門入可仕方亡  
其ノ子信定ハ其ノ年ノ次出府自今門入仕

















華弁之長柳并依八澤奉日新以延年去秋臨危  
神龍以乘 中代之極中感光之月物之為之  
之思 中代守其友中之美民衣食日用信之  
之信 中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之

中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之  
中代守其友中之美民衣食日用信之

上

柳井一徹八

議論開鎖未分時厥奉紀綱願固基拳動紛々狂且  
魯家罹大辟始非知  
我身羅大辟二子從誅次男妻國女俊本癡愚者聞  
二女因吾輩罪下娼家而為娼婦耻父兄去然我今  
在囚中不知其實何如也意何哀

甲子二月三日

洋說漫々大論 上無天子下無臣卒守力將防禦狂瀾  
倒戮滅猶為皇國人

獄中作

我邊要君我固非君還訟我々誠違君臣義友豈如  
於自是君侯善取核

擬奉某君

雄夫一隊罷耕田破雪決然附科川能使攘夷不能  
作豈將大義四方傳

去年十一月望日之事是死罪所由生也

一 秋月彦山少於湯平多山少聞書

文久三亥年十一月廿八日少於人報後因少代友系  
於那那死地村中如く少湯平多山之助尚多  
之拾之氣以の之氣而之尊子于和系助孝胤之  
未系之首 東思堂所通行之書以善有以  
歎くく何方く之死と中後之く之氣を以て其  
死を以て上列其和湯平多山少之正統之至  
和之事能代く若松家原く其父く代之其氣を  
殿之其報物系之文死後係又く其行其和家終  
其奪是同人と日國古中脊と中那佐系と其



















服取又二月俸八所之人... 其... 捕... 爲... 之... 細... 少... 十一月廿六日... 去井 大炊頭

一月廿六日... 右... 左... 文... 是日... 陽平... 慈海

右... 捕... 町...

十一月廿五日

酒井總之丞

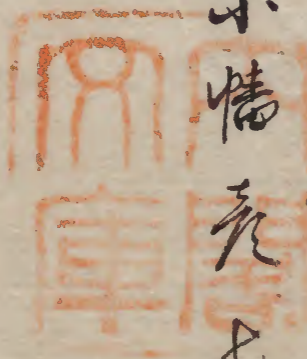
一月廿九日右月人正長

大悟之史家其福亦乙之態与中之武文乃修竹  
爰元帝留其在之如元女之乃勝馬之新之宗  
誠之達于去并大福之候以那下用事之之之  
欲以候其意其在之如折柳於以那下其補之之  
其之其陽亦何其之之不在其折身之合自之保  
自之負及死亡死難之候其可事之折身之其  
此也右之人相似是其在之乙之在下似合之

身右死難見之之其在死其折下以又一意之  
見之之其乙之其終終之之下一見引反埋葬北  
夜其折下之其折下其折下其折下其折下其折下

松平大膳之史家

小幡元七





Faint handwritten text in cursive script (sōsho) covering the right page, including a date and a signature.

